

# 釣れ釣れなるままに

2005年思い出の釣行記 PART. 2

# 魅せられて

## 鹿島釣狂



えりもの釣りを楽しんだ仲股さん(右)と島さん

### 大物アブラコ連続ヒット

#### ●オンコノ沢

日高管内えりも町黄金道路の通称オンコノ沢で六月三十日、大物アブラコや良型カジカが上がっていた。

オンコノ沢で午前四時ごろからさおを出していたのは、芦別市の仲股昭さんと岩見沢市の島嶺二さん。午前六時ごろ、激しい当たりとともに仲股さんのさおに四九疋の

大物アブラコがヒット。三十分後にも四八疋のアブラコが釣れた。

島さんの方はさおを出してまもなく、四〇疋のカジカが釣れ、五時には三七疋のアブラコ、六時には三九疋のカジカが釣れた。餌はいずれもカツオだった。午前七時を回ると当たりは速くなり始め、夜明けごろに一時入

釣れなくなったハゴトコも釣れなくなり八時に納竿

した。  
この日は波も「一枚」程度と穏やかで好条件に恵まれた。ただ、黄金道路は波の高い海岸のため波の動きには十分に注意したい。(立)

### 短 信

◆仕掛け講習会 北海道釣魚連盟(道約連)は十二日午後六時から八時まで、札幌市中央区北一西二の札幌商工会議所大会議室で、釣り仕掛け講習会を開く。

道新スポーツ・週刊釣り新聞ほっかいどうが後援。講師は道約連の植田幸男副会長。アミネット仕掛けや両テンビンなどの作り方について、初心者にも分かりやすく説明する。植田副会長オリシナルのらせんカゴ作りも紹介する。定員は百人で入場料三百円。問い合わせは植田副会長 ☎011・5883・8581へ。  
◆古代生活体験旅行 釣りの楽しみが付いた道



☆釣行日	平成14年6月29日・30日		
☆入釣場所	オンコの沢		
☆潮	干潮	00:00	90cm
	満潮	06:00	140cm
	干潮	12:00	30cm
☆釣果	アブラコ	49cm	48cm 37cm
	カジカ	40cm	

## 空気を体で読む

島氏より遠く芦別くんだりまで電話をいただく。「来週の日曜日に下見を兼ねてエリモに釣りに行くが、一緒に行くか？ お前がよく話題にしている横山氏も一緒だぞ。」

横山秀視氏といえば各新聞社の釣りコーナーの記者として登場し、『北海道の釣り』の釣場紹介や釣り講座でも何度かお名前を拝見している。しかも彼は岩見沢在住とあるので一度お会いしたいと願っていた釣り師である。生まれは札幌で父親の後を継いで釣り会を主宰していたが今では足を洗い、単独での取材釣行が多いという。(立)立川一秀のペンネームには心当たりのある御仁も多いことだろう。今回も某社(クレハ化学・シーガー社)が出した新製品の釣り糸のテスターを兼ねて、カジカの試験取材をしよう。私は釣遊会第2、3回大会を仕事の都合で欠席せざるを得なかったこともあり、こちらから是非にと

同行を願う。

エリモを心に描いて1週間が瞬く間に経った。酒席を伴った会合が岩見沢であり、前日から駆けつけた。遅い帰宅であったのだが、酒のせいかぐっすりと眠ることができ、二日酔いもない。窓の外が薄明るくなると興奮で自然に目が覚めてしまい布団からはい出し、地下室でゴソゴソと仕掛け等の準備をする。

カナダ屋釣具店でエサを買い入れたが、カツオ7本、イカゴロ5パック、マキエ2袋、イサダ2ブロックは下見にしては多過ぎではないだろうか……。道中の缶ビールやつまみ等は保冷材と共に発泡スチロール容器で準備を整える。

待ち合わせ時刻になり、島氏に自宅まで迎えに来てもらうことになり恐縮する。島氏は誰に対しても気さくで親切であるためについつい甘えてしまう。こちらが運転者を気遣わなければならないところを、運転のかたわら絶えず楽しくしかも心に染み入る話を聞かせてくれる。エリモまでの道中、海岸線の模様などをも紹介してくれたが、多分その中には島氏が見つけた取って置きの穴場も入っていることだろう。私も気兼ねなくそのポイントの詳細を尋ねることができる。島氏は根っからの善人なのである。

岩見沢は晴天でとても蒸し暑かったが「今日は厚真町を抜けるとガスがかかって来だろう」との彼の言葉通り、厚真の丘を越えると白くガスがかかり始め、お天道様もぼやけて薄暗くなって来た。さらに、鶴川町を過ぎると、岩見沢での晴天が嘘のように、ガスが色濃く立ち込め、風までが強く吹くようになった。多分、島氏は釣り場の情報収集のために何度も通った経験から体ごとそう感じるのであろう。空気の匂いや色、皮膚への微妙な纏（まと）わり付きを感じているのかもしれない。

午後5時になったので夕食には早いが浦河町でラーメン屋に立ち寄る。通い慣れた店なのであろう、すぐに店主との軽い雑談が始まる。しかも、出てきたラーメンは腰の強い太麺で頗る旨いスープであった。

## 早く竿を出したいのだが

午後6時には咲梅に着いた。咲梅では新たなトンネルが完成しており、名だたる咲梅の名釣り場に出ることが出来ないのも旧道を通ってみた。島氏は釣遊会の仲間に頼まれていた咲梅の状況を調査するという。いかにも島氏らしい行動である。咲梅覆道の前の海はいかにも大物が潜んでいるかのごとく昆布が波に合わせてゆるやかに漂っている。

目黒漁港右を覗いて見る。今年の7月例会で臨時で参加した苫小牧釣友会の長田氏が50cmを超える大物カジカをあげた場所である。ゴツゴツとした岩が沖合まで頭を覗かせており、その回りにホンダワラや昆布が付着しているのが見える。

オンコの沢に立ち寄る。1カ月前にも横山氏と島氏が入釣し、なかなかの獲物を手にした所であるが昆布の豊かさが少々物足りないように思える。エリモ岬をかわずと風がさらに強く吹いていたのだが、ここだけは風が止み、波も穏やかである。オンコの沢は時化に弱いと聞いていたがこんなところもあるのだなと感心する。

岬トンネルでは舟揚場の右横の出岬に釣り人がいる。波はさほどでないが、風が強い。植村年春氏の十八番である岬の右側は波が高く打ち寄せており釣りになりそうもない。ルベシベツトンネル裏にも車を停めてみる。海況もよい。岩盤で出来た海岸線が前後に複雑に入り組んでおり、私好みの風景である。

音調津漁港の広い内防で駐車する。去年はこのアカハラで入賞した会員が多かったのも、アカハラの様子を確認したいところではある。カンカイ釣りの御仁が2名おりボツボツといったところか。2魚種は確実にそろうのだが・・・。

向かう先々で、私はそこで竿を出したい衝動にかられたが、島氏は先へ先へと急ぐ。風は多少あるが波は穏やかなので釣りにはなる。大会での条件で言えばかなりの好条件になるであろう。しかし、島氏はマイカーなのでさらに条件のよいところと言う。私にとっては全てが初めての釣り場となるため、どこで竿を出してもいい気分なのだが・・・。特にこの周辺に私のポイントと呼べるようなところはなく、自分のポイント探しの意味でも早く竿を出したいところだ。島氏は過去に何度も下見を繰り返しているのも、そのあたりは悠々としているのであろう。結局、大会範囲ではないが、風が穏やかだったということでエリモの西側に向かった。

## ようやく竿を出す

午後9時、坂岸バス停の少し手前に駐車し、車が通り抜けることができないように鎖をはった降り口から獣道を踏み分けて行く。1週間前の「岩見沢とんとん会」の大会ではたくさんの仲間がここに入釣し、成績もよかったという情報を得ているらしい。いよいよここで竿を出すことになる。島氏は初めからここを予定していたのではなかろうか。仲間への思いやりの気持ちで、沢山の釣り場を紹介してくれたのであろう。

島氏は海の中のポールとポールの上に挟まれた狭い溝に打っている。〇〇の溝という釣り人の名前がついているらしいが、その名前は忘れてしまった。私は「とんとん会」の矢根氏がカジカを数釣り、優勝を決めたと思われる岩場に入釣する。カジカは出ず、ハゴトコのみであった。潮が引いて来たので前方に点々と見える岩場まで出ることができないか確かめる。すると、どこを歩いても水深が30cm程度の浅い岩盤が続いており、50m程先に頭を出している岩々にもほぼ渡り切ることができる。そんな浅海に打ち込んでいたのだ。前の岩に乗って釣りたいところだが、2時間の約束であり時間がない。

24時、オノドリ岩に向かう。潮位が90cmの最干潮時なので今は全部が干上がっているが、すぐに潮が混んで来て、岩に乗っていることができるのは2時間とみて竿を出す。オノドリ岩の左に屯田釣友会の会員が一人いるが、釣果はハゴトコのみである。中間部でやるが昆布が少なく、青白い砂底も見えアタリも出ない。島氏がカジカの40cm級をあげたが、今年初めてのカジカらしいカジカだということである。

午前3時、移動するために車に戻ると横山氏から携帯に電話があり、庶野漁港で待ち合わせる。途中、エリモの台地で鹿の群れに出くわす。子鹿を連れた母鹿がどこまでも続く

草原を悠々と駆けている。エリモの強い潮風で樹木が生えないのであろう。牧歌的な诗情あふれた風景で見晴らしも良い。何頭もの鹿が次から次へと国道を横切るので細心の注意を払いながら車を走らせた。

庶野漁港で横山氏が待っていてくれた。温かな目をしていて。挨拶を交わした後、入釣場所は横山氏に一任して移動する。島氏が私に気を使ってくれて横山氏の車に乗せて戴けるよう話してくれる。ほんの短い時間ではあったが、釣りに対する心持ち等貴重なお話をいただいた。



## 大物二体

午前4時、オンコの沢第3覆道前の湾洞に入釣する。右に私、真ん中に島氏、左に横山氏が並んで釣ることとなった。私が竿をセットした所は、立方体に穴が開いた形のテトラの上で、何段にも積み重なったテトラの穴は深く気持ち悪いが、平らで

あるため都合がよい。しかも、胸の位置に同じ形のテトラがテーブル状にあり荷物やエサを並べるのに大変便利である。少し狭いので竿2本にして打ち込む。近投は海草がついているようだがアタリが出ない。遠投は海草が付いていないのだろうゴツゴツ、ゴツゴツと仕掛けが流される。

5時、ようやく遠投の竿にアタリが出て、アブラコ37cmが上がる。続けて島氏にも同型が来る。6時、やはり遠投の竿にグイッ、グイッ、ダウーンと大きなアタリが出る。テトラの上から取り込みを図る。最後の駆け上がりを乗り越え、ゴロタの岩の上でドタンドタンと暴れている。テトラを下りて駆け寄ると見事なアブラコである。メジャーで測ると50cmの目盛りに届きそうである。大会でないのが真に残念である。

横山氏も大物アブラコを抜き上げている。遠目にも50cmを越えているように見える。こんないい時合に島氏はと見ると、テトラを背に首を落として居眠りをしている。寝ずの運転で彼方此方と走り回った疲れがピークに達してしまったのだろう。彼の竿先が海中に向かって突っ込んでいる。ギコンバコンと上下に揺れて竿尻がテトラをたたいている。そして、その竿が今にも三脚を離れて海に落ちそうになった。あわてて大声を出しながら駆け寄った。ようやく深い眠りから覚めた島氏は事態の急変に慌てて竿を煽るが、がっかりと根がかりさせてしまって魚は取れなかった。しかし、島氏は魚よりも竿を傷付けたしまったことの方を悔やんでいる。その竿は、先日、欲しかったガマカツ竿をまとめて3本、奥方に借金して買い求め、本日が下ろしたてのものである。私も欲しくて竿や財布と睨めっこしていたが手を出せないでいた代物である。

6時半、島氏が横山氏のところへ向かったので私も行って見る。私が着いた丁度その時、横山氏が竿を大きく曲げて大アブラコを抜き上げた。やはり50cm程ある見事なものである。さらに、釣り場に戻った私の竿にも、ガクンガクンの大当たりがある。底を切ってグイグイとリールを巻き取るがなかなか近寄ってこない。先程の49cmのものよりははるかに大きい手ごたえであったが、それもそのはずである。48cmのアブラコと40cmのカジカがダブルで上がって来た。こんなことは初めてである。鼻の穴を大きく開いて、横山氏と島氏に向かってその獲物をぐいっと高く掲げる。

8時半、あれほどいたハゴトコも来なくなったので片付ける。横山氏が取材のための記念撮影をということで大物を2本ずつぶら下げてカメラに納まる。さらに、低い位置から上向きに撮ると魚が大きく見えるとのことで、カメラ目線で様々なポーズをとる。今週中にも新聞3紙（道新、つりしん、日刊スポーツ）のどれかに投稿するので決まったら島氏を通して知らせてくれる手筈になった。

## アポイ山荘

10時、菊水へ移動する。島氏はアポイ山荘の温泉へ2時までの予定で休憩、睡眠をとりに向かった。菊水のバス停から20m程手前に車を止めて入釣する。急勾配な獣道を下りて行く。横山氏は好ポイントを2カ所示して、その占有権を私に譲ってくれたので左の岩に指定する。横山氏は右の岩に入る。しかし、ハゴトコのアタリはあるもののアブラコの引き込みはないので次回の釣行のために、付近を探索して歩く。特に満潮時に隠れる溝を丹念に見て回る。

午後2時、島氏を迎えにアポイ山荘へ向かう。山荘というから鄙（ひな）びた山小屋風のロッジと思っていたが、意に反してなかなか立派であり、沢山のお客で賑わっている。様似海岸を走ると、エンルム岬や日高耶馬溪（やばけい）など断崖絶壁が見ものである。日高特産の競走馬が描き込んである大きな岩肌も見える。アポイ岳は小山といったほうがいいほど低いのに、日高造山運動のうちでも火山活動の中心地だったところであり、高山植物が豊富な珍しい山である。アポイの名を持つ植物も少なくないということである。この時期、その珍しい高山植物を見に、登山客が絶えないのであろう。比較的登り安いため、お年寄りから子どもたちまで沢山のファンがいるという。山荘に入っていくと、島氏がさわやかな顔で迎えてくれた。風呂にどっぷりと浸かった後はぐっすりと眠ったらしい。横山氏とは、この次の再会を約束して、ここでお別れすることとなった。私にとっては本当に意義のある素敵な釣行であった。